

■第2次常総市都市計画マスタープラン策定委員会【第1回】 議事要旨

日時：令和4年12月2日（金）午後1時から

場所：常総市役所議会棟2階 大会議室

1 開催日時 令和4年12月2日（火）午後1時～午後2時40分

2 場 所 常総市役所議会棟2階大会議室

3 議事要旨

- (1) 都市計画マスタープランとは
- (2) 現行都市計画マスタープランにおける将来都市構造
- (3) 都市計画マスタープランの評価
- (4) 都市計画を巡る環境の変化
- (5) 都市計画マスタープラン改定の考え方

・マスタープラン（以下MP）改定に向けて、将来人口の目標値等の明記がないがその点の考えは。

→人口の将来展望については人口ビジョン等で目標が示されているので、基本的には総合計画と整合を取り、今後の策定委員会で示していく。

・改定の基本的な考え方や方向性については今後、議論する余地があるのか。

→改定の基本的な考え方は今後の20年間の将来都市像に対する肌感覚や市民の声を反映させる施策、土地利用の方法について行政内部でヒアリングしたものを落とし込んでいる。策定委員会等で災害ハザードリスク等の観点を踏まえた各分野の専門家のご意見もいただきながら議論を深めていく。

・これまでの生活圏（鬼怒川東側）と新たな生活圏（鬼怒川西側）について立地適正化計画を踏まえてどれほど踏み込んで考えているか。また、交通ネットワークもどのような形で議論を進めていくか。

→立地適正化計画は災害ハザードリスクが高いエリアを除外し、鉄道等の公共交通の利便性が良いエリアを誘導区域に設定している。また、「鬼怒川ふれあい道路」は一部開通し、ハザードリスクが低く常磐道谷和原ICにアクセスが良かったため、周辺地域で産業系の土地利用ニーズが非常に高い。市街化調整区域における地区計画を定めたエリア（坂手・内守谷）に既存の工業団地が配置されており拡充要望も多い。今後は「鬼怒川ふれあい道路」の未整備区間をどのように事業化していくか議論を進め、交通ネットワークについても今後落とし込んでいく。

・都市計画の流れ（コンパクトシティ）に反する新市街地の要素もあるので、道路整備と土地利用との関係や住居系のハザードリスクの高さ（既存市街地）を都市計画的にどう考え議論していくのか。

→鬼怒川東側に人口密集地区が多く、西側は豊岡町や内守谷町きぬの里の市街地を除けば産業系の土地利用や農村部の既存集落が多い。立地適正化計画に基づき既存市街地の誘導区域が市街化区域と比較し縮小したままだと、近隣自治体へ居住地を求めて更に人口流出が進んでしまう。国が進めるコンパクト+ネットワークの考えで常総線等の既存公共交通を軸に議論を深めていきたい。

・豊水橋西側は生活必需品を購入するために車や自転車等を使って鬼怒川東側へ移動しなくてはならず高齢者にとって不便な地域となっている。そんな地域にチャレンジしてくれる方もいるが、長続きしないという現状がある。そういうところを含めた計画が必要かと思う。

→豊水橋西側は市街化区域の中の商業施設が撤退している状況。行政単位を超えて近隣市に商業が集約され都市軸が移っている。市民や議員等から居住誘導するための住宅施策の要望が挙がってきており、今後は都市計画で方向性を定め民間の活力を最大限に活用していく。

・ 現行のマスタープラン（以下 MP）では市民協働体制の構築という言葉があり、地域づくり、まちづくり、人づくりという福祉と共通項があるので、その辺をどう融合させていくか。また地域別構想を前回8ブロック→今回6ブロックに集約しているが現行計画の成果あるいは達成度、それに対する課題が改定のポイントにつながっていくと思うが、事務局の考えはどうか。

→8ブロックから6ブロックに変更したのは圏央道の開通など社会インフラの状況が大きく変化していることや令和9年度には国道354号BPが無料化され大きな東西の都市軸として形成される点を踏まえて再編した。また、市民協働についての取組みも日々深化しており、今後も市民ワーキングや地域別懇談会など実施していくので、その中で地域住民の方々のご意見をいただきながら進めていく。

・ 既存ストックをうまく活用して眠っているものを掘り起こしたり、磨いて人が集まったり、それを公共交通事業者等がネットワークとしてつないで活性化することが今後できたらよいと考える。

・ 一つは、市の洪水ハザードマップ（以下 HM）は1,000年に1回の災害想定になるが、避難想定はこれでよいが、都市計画を考えるときは100年とか50年程度の想定で考えるべき。もう一つは、水害とまちづくりの連携といった時に洪水 HM を前提に土地利用を考えるだけでなく、河川整備や水の溢れさせ方、溢れた水の流し方等を計画的に考えていくということも今後の河川整備とまちとの関係性を考えたときのキーワードになっていく。その辺の議論を都市計画 MP だけでは難しいかもしれないが、石下と水海道の中心市街地はかなり歴史もある地区なので進めていただきたい。また、立地適正化計画の居住誘導区域から除外すれば防災上の問題が解決するということではないので、例えば浸水想定区域の集落とか、誘導区域から除外された既成市街地だとか、安全性をどう高めていくかということも合わせて検討していく必要があると感じる。

・ 都市防災の観点からも避難が主な考え方なので、都市計画やまちづくりにあたってはどのように検討を進めていくか、都市計画分野、まちづくり分野でそういう議論が必要であると感じた。一方、「流域治水」という言葉が出てきているがこれは令和元年東日本台風を受けて、河川管理者だけでは今の気象状況で治水はできない、田んぼダムや内水の調整池、下水道調整池などで水を貯めてもらい河川に水を流さないという考え方。特に常総市は鬼怒川、小貝川下流域にあるので、上流域の河川改修が進めば進むほど常総市に水が流下してくるという非常に厳しい場所。流域治水という考えをまちづくりや都市計画にどう生かしていくかは今後議論が必要であると感じる。

・ これからの道路交通網を考えていくと2つ観点がある。一つは無人の自動運転車が将来公道を走るという観点での道路整備が必要で渋滞しない道路の構造を最初から仕組んでいく。もう一つ、電気自動車化。カーボンニュートラルでCO₂削減は必達、地方の交通手段は軽自動車がメインだが、ガソリン車から電気自動車に替わった時に車を所有する人が減り、シェアカーの需要が増えてくる。短距離しか移動しないシェアカーが出てくるとマイクロモビリティが登場してくる可能性が大きい。そういうモビリティのシフトも考慮し、今後の道路を整備するために仕組んでいくのがいいのではないか。

（以上）